

一度目の誕生日。顔も知らぬママが額にキスして祝福してくれた。

二度目の誕生日。私にはなにもない。

カプセルの蓋が開いた瞬間、金属の棺の中で停まっていた少女の時間が歯車が噛みあうようにゆつくりと動き出した。象牙のように滑らかな肌、薄桃色の可憐な唇。

アーモンド型の目はストロベリーソーダの色素を溶かし込み、豊かな黒檀の巻き毛が腰に纏わり付く。

それはむかしむかしの童話の一場面を思い起こさせた。

お后に美貌を妬まれ、魔の森に追放された白雪姫。

桜桃の唇で瑞々しい林檎にくち付け、真珠のように白い歯で果肉を齧った刹那、彼女の体に毒が廻り、麗しの姫は哀れ還らぬ人となったのである。

小人たちは嘆き哀しみ喪に服し、最愛の姫を色とりどりの花で埋もれたガラスの棺に横たえた。

とこしえに美しくあるように。

唇は黙して何も語らず、紅玉の目は決して開かず、象牙の肌は冷え冷えとさながら氷のように。

沢山のチューブで繋がれた金属の棺から息を吹き返した少女は、王子さまのキスの訪れを待たず自ら目を開けた。

「……………」

錆びた歯車が軋み、停滞した時がゆつくりと動き出す。

美しい少女は虚ろな目であたりを見回し、白く華奢な爪先を絨毯に降ろすや、赤ん坊のように覚束ない足取りで部屋中を見て回った。

部屋の中央に設えられた流線形のカプセルは銀の光沢を纏い、宙で静止した棺の蓋はウスバカゲロウの羽のように透明だ。

カプセルの右手には猫足のテーブルが一脚、その上には白磁の水差しがちよこんとのつかっている。

左手には巨大な本棚があった。

目の位置にある本の背表紙を撫で、指先に付着した埃を物珍しそうに眺めていた少女は、正面を向いて目を睜った。正面はガラス張りで、外の光景が¹⁸⁰の大パノラマで見渡せた。

それは不思議な光景だった。

暗黒の宇宙を照らす無数の微小な星と大小の惑星。ガラスを隔てた鼻先を透明標本のような魚が通過してゆく。

透けた皮膚に脈動する小さな心臓。

宇宙を遊泳する未知の生命体に見とれた少女は、蝶番が軋む音にハツとして振り返る。

リノリウムの廊下を背に白衣の男が立っていた。

均整のとれた長軀、知性を帯びた切れ長の双眸。銀縁眼鏡で端正な鼻梁を強調したその男は、窓辺の少女に優しく微笑みかける。

「おはよう、白雪・リフレイン」

白雪・リフレイン。

知らない。けど懐かしい響き。

少女はきよとんとして男を見詰めた。白衣の男は革靴で絨毯を踏みしめ、一直線に少女の下へ歩み寄った。

「覚醒直後で記憶が混同してるらしい。長期の冷凍睡眠被験者にはよくある症状さ」

れーとーすいみん？ ひけんしゃ？ 何を言ってるのかさっぱりわからない。

男は当惑した少女の肩に手をおき、安心させるように微笑む。

「いいかい？ よく聞くんだよ。君の名は白雪・リフレイン、年齢は14歳。出身地は地球だ」

「ちきゆう？」

「あの星さ」

男が指差した先を見て、少女は窓ガラスに張り付いた。

それは覚醒した少女の目に一際美しく輝いて見えた、宇宙に浮かぶ青い惑星。

「今は地球暦3010年……病が完治した君は今日、200年の冷凍睡眠から目覚めたんだ」

「ちきゆう……」

その名を舌に載せた刹那、砂漠に湧く地下水のような甘い郷愁が、体の底から湧き上がってきた。

地球。

私の故郷。

おかあさんとおとうさんがいる星。

「かえりたい。ちきゆう、かえりたい」

「今はまだ無理だ。いくら病が完治したとはいえ君の体調は万全ではない。激しい運動や外出は禁物だよ」

男は膝を屈め、少女と同じ目の高さで胸の名札を指さす。

「申し遅れたね。私は君の担当医だよ」

「たんとーい……おいしゃさん？」

「そうだ、お医者さんだ。よろしく、白雪」

若い医師が握手を求めてさしだした手を、白雪はぎゅっと握って自分の胸に引き寄せた。

服の生地越しに控えめな胸のふくらみを感じ、医師はぎよつとして腰を引いた。

少女は彼の狼狽など少しも斟酌せずに、医師の手を胸にあてにっこりと微笑んだ。

「よろしくね、せんせい」

刹那、医師は自分の立場も少女の年齢も忘れてその笑みに魅入られた。

一点の曇りもない、赤子のように無垢な笑顔。

医師を正気に戻したのは、白雪の訝しげな声だった。

「せんせい、どうしたの？」

ハツとして顔をあげた。白雪が小首を傾げている。

医師は慌てて彼女の胸から手を放すと、頬を仄かに赤くしと言った。

「……詳しい話は、君の記憶が完全に戻ってからだ。今日のはこれまで。なにか困ったことがあったら、すぐにナースコールするんだよ」

「なーすこーる？」

「カプセルの右手の壁にボタンがあるだろう。あれを押すんだ」

「うん、わかった」

「それじゃ、また」

白雪の従順な受け答えに医師は胸を撫で下ろし、踵を返し

て去ろうとする。

その裾を遠慮がちに誰かが掴む。

ふと振り向くと、頬をふくらませた白雪がいた。

医師は膝を屈め、拗ねたように唇を尖らす白雪を下から覗き込む。

「どうしたんだい？ まだ何か用があるのかい」

「……やだ」

「うん？」

医師が顔を近付けると、白雪は目に大粒の涙をためて俯く。

「……いつちややだ」

唇から漏れたかすかな呟きに、医師は困惑げに眉をひそめる。

「……私はこれから仕事があるんだ。他の患者のカルテの整理をしなければいけないし、会議にも……」

「いつちややだ」

まるで駄々っ子だ。

医師は苦笑して白雪の肩に手をおいた。

「わがままをいって困らせないでくれ。私がいけないと、他の患者さんが寂しがるんだ」

「……さびしいの？」

「ああ」

「しらゆき、さびしいのやだ。みんなもさびしいのいや？」

「そうだ」

白雪は視線を揺らして躊躇したが、小さく嘆息して白衣から手を放した。

医師は微笑して白雪の頭の手をおいた。

「いい子だ、白雪」

頭におかれた温かな手の感触に白雪は唇を綻はせたが、ふいに表情を曇らし、不安げに潤む目で医師を見上げた。

「せんせい、またくる？」

一途な目で乞われて医師は胸が詰まったが、微笑を繕って白雪の視線を受け止めた。

「ああ、もちろんだ。明日の朝にくるよ」

「ほんとう？」

「本当だ」

「ゆびきりげんまん」

白雪がさしだした白い小指に小指を絡め、医師は二・三度揺らした。

「うそついたらはりせんぼんのーますっ。ゆびきつたー」

白雪は医師と小指を繋げたまま、白い頬を紅潮させにこりと微笑んだ。医師はつられるように微笑した。

翌日。

白雪の病室を訪れた医師は、部屋の惨状を目の当たりにし

て立ち尽くした。

「なにをしてるんだ!？」

絨毯の真ん中に寝そべり、分厚い書物を広げていた白雪が喜び勇んで跳ね起きた。

「せんせい!」

白雪は両腕を広げ医師の胸に飛び込もうとしたが、絨毯を埋めていた本に躓き、勢いよく顔から転倒する。

医師に助け起こされた白雪は照れ笑いでちろりと舌の先を覗かせた。

医師は脱力して白雪に聞く。

「で? どうしてこんなことをしたんだ」

白雪の病室に敷かれた絨毯は一面本の海と化していた。本棚は空。白雪は「だつてえ〜」と口を尖らせた。

「せんせい、あさくるつていったのに、ぜんぜんこないんだもん。しらゆき、つまらないからごほんよもうとおもったのに、ここのごほんじばつかで、しらゆきちつともわかんない。ちつともたのしくない。せんせい、なんでこのへやのごほんにはえがないの?」

医師は片手で額を覆って呟く。

「退行現象か……」

「たいこーげんしょー?」

白雪をカプセルに導いた医師は、彼女をカプセルの縁に座

らせるや噛み砕いて説明する。

「退行現象とは、頭の怪我や長期の睡眠がもとで子供のころに戻ってしまう現象のことさ」

そして、白雪が腰掛けている流線形のカプセルを意味ありげに一瞥した。

釣られて自分の腰の下に視線を落とした白雪は、銀の光沢帯びた人工の繭の脇腹を踝で軽く蹴る。

カプセルが涼やかな音をたてた。医師は白雪の目を見詰め、抑揚を欠いた声で述べた。

「君は二百年間このカプセルの中で眠っていた。今の君の状態……記憶喪失や退行現象がそれだ。白雪、現実の君は14歳の女の子なんだ。14歳といえば思春期の真っ只中だ。極端に異性を意識したり父親に生理的な嫌悪感をもったり……そういう悩み多き年頃なんだ。しかし今の君の精神年齢はどう高く見積もっても……実年齢より10は下だ」

白雪は大きな目を瞬き、小鳥のように小首を傾げて訪ねた。「それって、いけないことなの」

医師は驚いて白雪を見返す。白雪は哀しそうに目を伏せた。

医師は小声で言った。

「……いけないはないさ」

白雪の目を見返す勇気が湧かず、医師は目を伏せた。カプセルに腰掛けた白雪の足が揺れていた。

「……せんせいわたしはじゅーよんさいのほうがいいの」白雪の目に大粒の涙がたまる。

「しらゆき、よくわかんない。おへやちらかしたのがわるかったの？ ごめんない。しらゆきあやまるよ。でも……でもしらゆき、わかんないよ。しらゆき、おきたときからこうだったもん。いまのじぶんしかしらないもん。だから……だから……」

白雪は堪えきれずにしゃくりあげた。

「もともどるほうほうなんか、わかんないよお……」

ポツ、ポツ。絨毯に染み込む涙。

白雪は鼻水を啜り上げながら言葉を繋ごうとしたが、医師はそれを遮り彼女の肩を抱き寄せた。

「いいんだ、白雪。君はそれでいいんだ」

医師は乾いた手で白雪の背中を擦りながら、彼女の嗚咽に耳を傾ける。

「いそぐことはないさ、一緒に記憶を取り戻していこう。ゼロからひとつずつ学んでいこう」

医師の腕の中で白雪はこくこく頷いた。

「……せんせい、ひとつおねがいがあるの」

「なんだい」

「……しらゆきにもよめるごほん、もつてきてくれる？」
医師は碎顔して我が子にするように白雪の頭を撫でた。

「ああ、わかった」

「ほんとう？」

「約束するよ」

白雪は向日葵が花開くようにパツと顔を輝かせ、医師の腰に抱き付いた。

「せんせい、だいすき！」